

しかし収束雲の発生と持続のメカニズムなど、まだまだ説明を要する問題がある。

以上は、シンポジウム の話題提供の要約であるが、多くの参考文献は到底載せきれないので省略しました。

おわりに

伊藤 宏

最後に将来の問題点を資料を作成する側から検討してみたいと思います。そのために現在実用に供せられている三つの衛星の比較の中から話題を出してみたいと思います。第1表は三つの衛星システムの比較一覧表です。本日は時間の関係で、表中にみられる4項目に限ることにいたします。

(1) センサー：米国の GOES に搭載している VAS (VISSR Atmospheric Sounder) は目下運用のテスト中です。観測時間がかなり長いことなど問題点が多いので、テストの結果を充分見極める必要があると思います。水蒸気の吸収帯による画像は既に NIMBUS 以来沢山の検証例にみられるように対流圏上層の循環に関する情報を雲のない領域についても与えてくれる点で有用と

思われます。したがって、次のステップのセンサーとしては水蒸気の吸収バンドを加えることが検討課題と思います。

(2) 撮像：静止気象衛星の最大の利点は広い範囲にわたって連続的に監視できることです。米国及びヨーロッパ連合の場合はその利点を積極的に活用しております。日本でも台風や大雨時の臨時観測では1時間毎ですが、それを常時その程度にまでしてゆくことが次のステップの課題と思います。

(3) 配信：日本では MDUS (中規模利用局) に対しても、SDUS (小規模利用局) に対しても、画像処理の終わったあとアナログ信号に変換し、ファクシミール形式で配信されています。米国及びヨーロッパ連合では MDUS に対応する受信局にはデジタル信号 (Stretched VISSR) が配信されています。この方式のほうが観測回数の増加には向いているので今後の問題として検討することが望まれる。

第1表 静止気象衛星システムの比較。

		米 国	ヨーロッパ連合	日 本
セ ン サ ー	波 長 帯	VIS. 0.55~0.75 IR. 10.5~12.5 VAS (IR 12バンド)	VIS. 0.4~1.1 IR. 10.5~12.5 IR ₂ 5.7~7.1	VIS. 0.55~0.75 IR. 10.5~12.5
	問 題 点	水蒸気の吸収バンド		
撮 像	所要時間	18.2分	25分	25分
	観測回数	48 (30分毎)	48 (30分毎)	14 (3時間毎と30分毎6回)
	問 題 点	観測回数の増加		
配 信	データ形式 気象資料 受信局	デジタル GOES-W 28/63/日 Stretched VISSR 16 WEFAX 160	デジタル 有 PDUS 8+(4) SDUS 306	アナログ 無 MDUS 10 SDUS 20
	問 題 点	データの定量的利用に不向き、観測回数の増加に不向き		
デ ー タ の 保 存	CCT	1978年以降の生データ	METEOSAT-1 の生データ全部 Climatorogical Data Set (3 hr)	2年 生データ
	問 題 点	保存期間の延長		

3. 低気圧，大雨（雪）などの解析への利用

(4) データの保存：今日は磁気テープの保存についてのみお話しします。日本の場合，現行のデータ収録方法では巻数が多くなるので，止むを得ず2年にしておりますが，有効データのみを抽出して巻数の減少を計れば，より長い期間の保存が可能になります。目下その方向で改善を計っております*。

* 上記の有効データの抽出は昭和57年10月1日から開始しました。